

当院通院治療室におけるがん化学療法時の低栄養状態の発生頻度について

野本尚子¹⁾、野地有子²⁾、野崎章子²⁾、櫻井健一³⁾、中野香名¹⁾、新井誠人⁴⁾ 滝
口裕一⁴⁾ 古川勝規^{1) 5)}、岡本美孝^{1) 6)}

- 1) 千葉大学医学部附属病院 臨床栄養部
- 2) 千葉大学大学院看護学研究科
- 3) 千葉大学予防医学センター
- 4) 千葉大学医学部附属病院 腫瘍内科
- 5) 千葉大学大学院医学研究院 臓器制御外科学
- 6) 千葉大学大学院医学研究院 耳鼻咽喉・頭頸部腫瘍学

【目的】近年がん化学療法の治療は、入院における治療から外来へ移行している。これらの支援から平成 28 年度の診療報酬改定では、「がん」の病名を持つ対象全てに栄養指導料の診療報酬の算定が可能となり、がん患者に対する栄養指導件数は増加している。しかし、外来におけるがん化学療法時の栄養の介入は必ずしも十分な体制が整っておらず、外来にて治療を行っているがん患者のうち栄養介入が必要な対象の割合は必ずしも明らかではない。

そこで、本研究の目的は、外来にて化学療法を行う対象を明らかにすることである。

【方法】対象は、千葉大学医学部附属病院通院治療室にて化学療法を行っている 2017 年 10 月 2 日から 5 日迄に本院通院治療室にてがん化学療法を行った対象のうち 2016 年 4 月~2017 年 12 月までに本院の通院治療室アセスメントシートもしくは、化学療法同意書を作成後に化学療法を行ったがん患者 235 名（男性 116 名、女性 119 名）。

方法は栄養評価指標（BMI、血清 ALB 値）の低い栄養状態（BMI18.5 kg/m²未満、ALB3.5g/dL 未満）の発生頻度について後方視的に調査を行った。更に、対象を年齢（高齢群：65 歳以上、非高齢群：65 歳未満）及び性別（男女）に分類し、それぞれ二群間について栄養学的指標（BMI、ALB）を比較した。統計解析は、IBM SPSS Statistics ver24 を用いて行い、有意水準は $p < 0.05$ とした。本研究は、千葉大学大学院医学研究院倫理審査委員会の承認の基実施した。

【結果】ALB3.5g/dL 未満の発生は、29 例（12.1%）、BMI18.5 未満は、37 例（15.4%）であった。

更に、ALB、BMI について一方の栄養評価指標（ALB、BMI）が低値である対象は 52 例（22.2%）、両者共低値である対象は 7 例（3.0%）、両者共に低値でない対象は、175 例（74.8%）であった。高齢群と非高齢群の平均 ALB 値は、非高齢群に比し、高齢群において有意に低く（高齢群 3.9 ± 0.4 vs 非高齢群 4.1 ± 0.5 g/dL $p = 0.001$ ）。男女の 2 群間において差はなかった。平均 BMI 値は、高齢群、非高齢群及び性別の二群間において差はなかった。

【考察及び結論】本研究において何らかの栄養学的指標が低値である対象は、25.2%であり、これらの対象が栄養の介入が必要な可能性がある。更に、高齢の場合は ALB が低くなりやすい為に注意深くスクリーニングを行う必要があると考えられた。また、本研究は、化学療法開始時に栄養学的指標が低い対象が、化学療法中の治療に与える影響や治療開始後の栄養状態の推移について検討されていない為、この点について追加調査を行った上で、更に対象者を決定する必要があると考えられた。